

感性のデータ化 (10)

擬似シングルトリガー

今も時々富田勲氏のアナログ音源時代のレコードやCDを聞くことが有ります。彼はベロシティーに頼らないですべての作品を仕上げました。お気付きとは思いますが彼の作品に「ピアノ音」による表現が無いのはそのためです。彼の作品では無表情に録音されたトラックをコンピュータ・ミキサーで丁寧にボリューム操作して表情を付けています。それも1音ずつのボリューム操作(MIDIコントロールでは#11のエクスペッションに相当)とフレーズやトラック全体に対するもの(MIDIコントロールでは#7のボリュームに相当)そして、全トラックに対して行うものがあります。

彼が好んで使った「口笛」の音では、一息で吹く感じが良く出ていますが、今時のデジタルシンセでは逆立ちしてもあの生き生きした感じは出せません。

また、彼はズッシリとした重量感のある低音のフレーズをよく用いています。手弾きで入力していた彼が気持ち通りレガートで弾くとそれが自動的にあのシングルトリガーの音になっていたのです。

昔私が各地を廻ってシンセの講習会をしていてむしろ困っていたのが当時のアナログシンセがシングルトリガーであることを知らずに「ピアノのように弾く」受講者が多くて、「予期しないレガート」や「予期しないフレーズ」になって首をかしげて居たことでした。そんな受講者に私は常にこう言い続けて来ました。「一本指で弾いて下さい」。そうするとたちまち音が変わるので受講者たちから感動のどよめきが聞こえてきました。この場合の「一本指弾き」はマルチトリガー機能の無かった当時のシンセをあたかもマルチトリガーに切り替えるような弾き方だったのです。つまり、当時のシンセは基本はシングルトリガーだったのですが、弾き方でマルチトリガーにもなったのです。その後シンセのポリフォニック化が進み、今度はマルチトリガーが常識になったのですが、今度は弾き方でシングルトリガーにすることはできなくなってしまったというわけです。

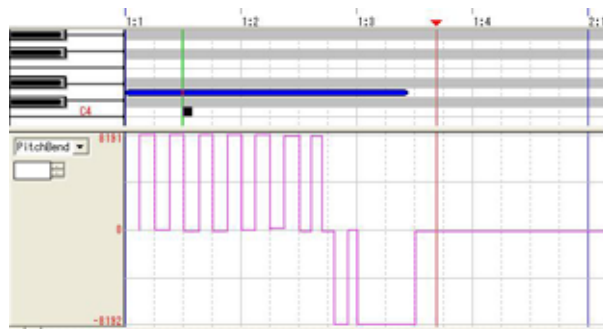
前号で「少々面倒臭いですがある方法でやってみたらかなりうまく行きました」と紹介したのがDTM上でデジタル音源をあたかもシングルトリガーのように鳴らす方法ですが、使う道具は「ピッチベンド」です。なーんだとお思いでしょうが、やってみると結構面倒くさいものなんです。デジタル音源でも最近の音源は「生音」をサンプリングして標本化したものを音源にしています。

それにピッチ変化を加えるためには「早読み」か「部分読み」をするわけです。アナログシンセでは直流電圧で発信器の周波数を制御していたわけですが、FM音源あたりから「演算方式」に近づいて来た結果、ピッチ変化(特にポルタメントやグリッサンド)のためにそれ専用のCPUが必要になるほど大変なことになってきたわけです。まして、高速になったとはいえパソコンのソフト音源でこれをやるのは50ccのバイクでハイウエーを走るような過酷な状況なのです。ですからソフト音源では「ピッチベンド」の幅がせいぜい上下長2度つまり半音二つ分しかとれず、高級な外付けMIDI音源の上下1オクターブ以上も可能なものとは比較になりません。

それでも上下長2度ということは最大「ドからドレミ」とシングルトリガーで音が動かせるわけですから、特にマルチトリガーで評判の悪い木管や弦楽器のトリルのようなお隣の音との往復には十分使えるのではないかと言うことになります。



前号のトリルはピッチベンド画面で次のようになります。演奏してみるとシャキとした切れのあるトリルにはなりません。これは前に述べたように「計算に時間がかかる」ので音源がパニック寸前になっているからです。従ってテンポの速い曲ではこれは使わない方が良いでしょう。スローな曲では味のあるトリルになります。



この場合ピアノロール画面でないと実際に鳴っている時間が見えませんがうまくできません。前打音的な装飾音符では非常にうまくゆくことが多いですが、長い音符のレガートフレーズでも試して下さい。音源が良ければすごくきれいに聞こえます。外付け専用音源推奨。